

第 14 回米百俵賞受賞

(平成 22 年 6 月 15 日表彰)

NPO 法人

日本ネパール女性教育協会

(東京都文京区)



ネパールの少女の就学率向上のため、学生寮を建設し遠隔地の少女を教員として育成する環境を整備した。

■受賞時プロフィール

平成 8 年の「日本ネパール国交樹立 40 周年記念シンポジウム」の開催を機に「ネパールの少女の教育について考える会」が結成されて以来、数次に渡りネパール周辺部の農村地域における少女の就学事情について調査が行われた。

ネパールには義務教育がなく、学校に行ったことがない村人たちは、貧しい中で女の子には教育は必要がないという考えが根強い。村の少女は、水汲みや畑仕事などの家事一切を手伝う働き手として考えられ、就学率が極端に低い状況にある。

「学校に行ったことがないし、読み書きもできない。将来の夢なんてとてもな

いわ」と話す少女らの実態に胸を痛めた代表の山下氏ほかの「考える会」のメンバーは平成 15 年に会を「NPO 法人日本ネパール女性教育協会」に改組し、ネパールの少女の現状を何とかできないかと模索し続けた。

会では、遠隔地域で女性教員が活躍することにより、彼女たちがロールモデルとして、少女にも教育が必要であること



▲幼稚園での授業の様子

を村人に啓発してゆくことが効果的であると考え、教育から取り残されたり、貧しかったりする村から少女を選抜して2年間ポカラの大学で教職課程を学んでもらい、その後少なくとも3年間は自分の村で小学校の先生をしてもらうという取り組み「女性教員養成プロジェクト」を開始することとした。日本の師範学校制度の導入である。

また、会では、2年間の修学にかかる費用や3年間の勤務中の給与を補助するため、日本国内に「フォスターペアレント（里親）システム」を作り、里親からの寄附の下で少女たちが勉強できる経済的環境を整えた。

平成17年、在ネパール日本大使館から学生寮の建設費の一部として「草の根・人間の安全保障基金」を供与され、ポカラ・カニヤ・キャンパス（ネパールの大学）内に学生寮の建築に着手。平成18年8月に学生寮「さくら寮」が完成し、遠隔の村などを中心に募集した第1期女子学生10名が同キャンパスで教職課程の履修を開始した。現在は、4期生が入学し、3期生とともに、教職課程の履修に励んでいる。

既に2年間の履修を修了した1・2期生の20名は、それぞれの出身地で教員として地域の少女の就学率向上のため奮闘を続けており、厳しい教育条件の途上国においても、少女たち誰もが小学校教育を受けられる土壌を作るために活動している。

会では、今後卒業生の赴任先への訪問やフォローアップ研修の実施を通じて指導助言に当り、卒業生がネパール遠隔地域の指導的立場の教員として成長できるよう支援を続けて行くこととしている。計画では10期100人の卒業生を輩出する予定で、現在も履修に励む少女たちを支援し続けている。

■受賞後の活動

日本ネパール女性教育協会は、米百俵賞受賞後も女性教師の養成を続け、平成29年に第10期生が無事卒業。その後、3年間教員給与を支援し、令和2年に100人の「おなご先生」を養成するという当初の目的を達成した。

協会では、卒業生教師の教育能力向上のため、毎年フォローアップ研修を実施。毎年約40人が参加し、お互いの教育上

の悩みを共有したり、日本の指導者から新しい教育方法を学ぶなどの取り組みを行った。

また、遠隔地域の小学校に勤める卒業生教師のために赴任地訪問を実施。さくら寮で学んだ「豊かな人間性を育む教育」を実践しているかを視察する取り組みも行った。政府雇用の先生が山村地域の言葉がわからず立ち往生する中、その村出身のさくら寮卒業生は大活躍している。

さらに、卒業生教師のうち、毎年1人を文京学院大学の交換留学生として受け入れる協定を締結。ネパールからはこれまでに6人が来日し、国際連携プログラムで世界中の学生と日本文化を英語で学んだり、人間学部児童発達学科で日本人学生と机を並べて学んだり、長岡市

立和島小学校を含む関東近辺の小学校などで教育実習を体験したりした。

協会は、令和3年3月31日をもって活動を終結したが、さくら寮の卒業生はそれぞれの地域で教師として立派に活躍を続けている。



▲ピアニカ指導の様子

■主な受賞歴

- 平成20年 第1回自由都市・堺 平和貢献賞（奨励賞）
- 平成26年 第7回かめのり賞